

◆吉備池廃寺の調査—第95次

1 調査の経緯と概要

吉備池廃寺は桜井市吉備に所在する溜め池「吉備池」の護岸工事計画に伴う調査で発見された飛鳥時代の寺院跡である。この調査は遺跡保存の資料を得る目的で桜井市教育委員会と共同で行っている調査の3回目である。

吉備池の南東隅と南辺には2つの大きな土壇があり、主に東南部で瓦が採集されることから、瓦窯説と寺院跡説とがあった。南東部の護岸の取り扱いを探るために、1997年1月から東の土壇の発掘調査（第81-14次）が計画され、それに先立つ地中レーダー・磁気探査では、瓦窯ではなく巨大な基壇らしい反応があった。

発掘調査の結果は探査成果を裏づけるもので、東の土壇は東西37m、南北約28mの掘込地業の上に、版築土を積んだ高さ2m以上の巨大な基壇であって、南面する金堂跡と判断した。出土した軒瓦が西暦641年に造営が開始された山田寺所用瓦の祖型にあたり、基壇および想定される伽藍の規模が通常の飛鳥時代寺院の規模をはるかに越える巨大なものであることなどから、この寺院跡は西暦639年に舒明天皇が発願した「百濟大寺」跡である可能性が高いと考えられた。

1998年1月からの西の土壇の調査（第89次）では、それが一辺30m近い方形で、高さ2.1m以上の基壇であり、中央部に南北8m、東西6m、深さ0.4mの巨大な抜取穴があることから、塔跡と判断した。ここでは掘込地業ではなく、旧地表面から版築土を積み上げて造られていた。基壇規模の大きさからも「九重塔」である可能性が高く、寺院跡が「百濟大寺」である可能性はいっそう高まった。

また、塔基壇南端の南方約30mに幅約6mの回廊があることを確認した結果、吉備池廃寺の伽藍は、東に金堂、西に塔があり、回廊がそれらを取り囲む「法隆寺式伽藍配置」であって、両基壇間の中央部南方に中門が開くものと想定された。中門想定位置の水田畦畔が南に張り出

してみえることもその推定を支持していると考えられた。

1998年10月～12月、桜井市教育委員会は吉備池の東北部で宅地造成に伴う発掘調査を行って、大規模な東西棟掘立柱建物を検出し、中枢伽藍との位置関係から僧房の一部と推定した。基壇外装材がみられず、出土軒瓦が少ないこと、回廊が痕跡的であることなどを理由に、早くも提出された吉備池廃寺未完成説を否定する重要な発見であった。

これらの成果をうけて、今年度の調査は伽藍の規模と構造を把握するために、(1) 南面回廊の中央に想定される中門跡の確認を目的として、その西半分と回廊の一部が収まるであろう水田（小字カムリ石）と、(2) 西面回廊あるいは寺地の西限を探る目的で、塔の西の水田3枚（小字辻カマチ）に調査区を設けることにした。調査の進行に伴い、(3) 回廊南西隅想定位置にも小規模な調査区を設定した。調査面積は合計約720m²。

結果、(1)では南面回廊を長さ17m分検出し、それが金堂と塔の中軸線を越えて東に延びていることから、そこには中門が存在しないことが判明した。(2)では南面回廊北雨落溝の抜取溝と類似した溝を痕跡的ながら確認し、塔基壇西端から23mに、南面回廊と同規模で西面回廊が想定できた。また、西面回廊の外に北東～南西へ延びる暗渠SD210を発見し、少なくとも塔基壇から西50mまでは寺地に含まれることが明らかになった。しかし、回廊外側雨落溝の南西隅部に設けた(3)では明確な遺構は確認されず、回廊規模等についても、なお調査検討が必要である。調査は1999年1月7日に開始し、4月22日に終了した。

2 検出遺構

以下では、便宜的に(1)を南1区、(2)を東から西2～4区、(3)を南西区と呼称し、検出した遺構を調査区ごとに概述する。

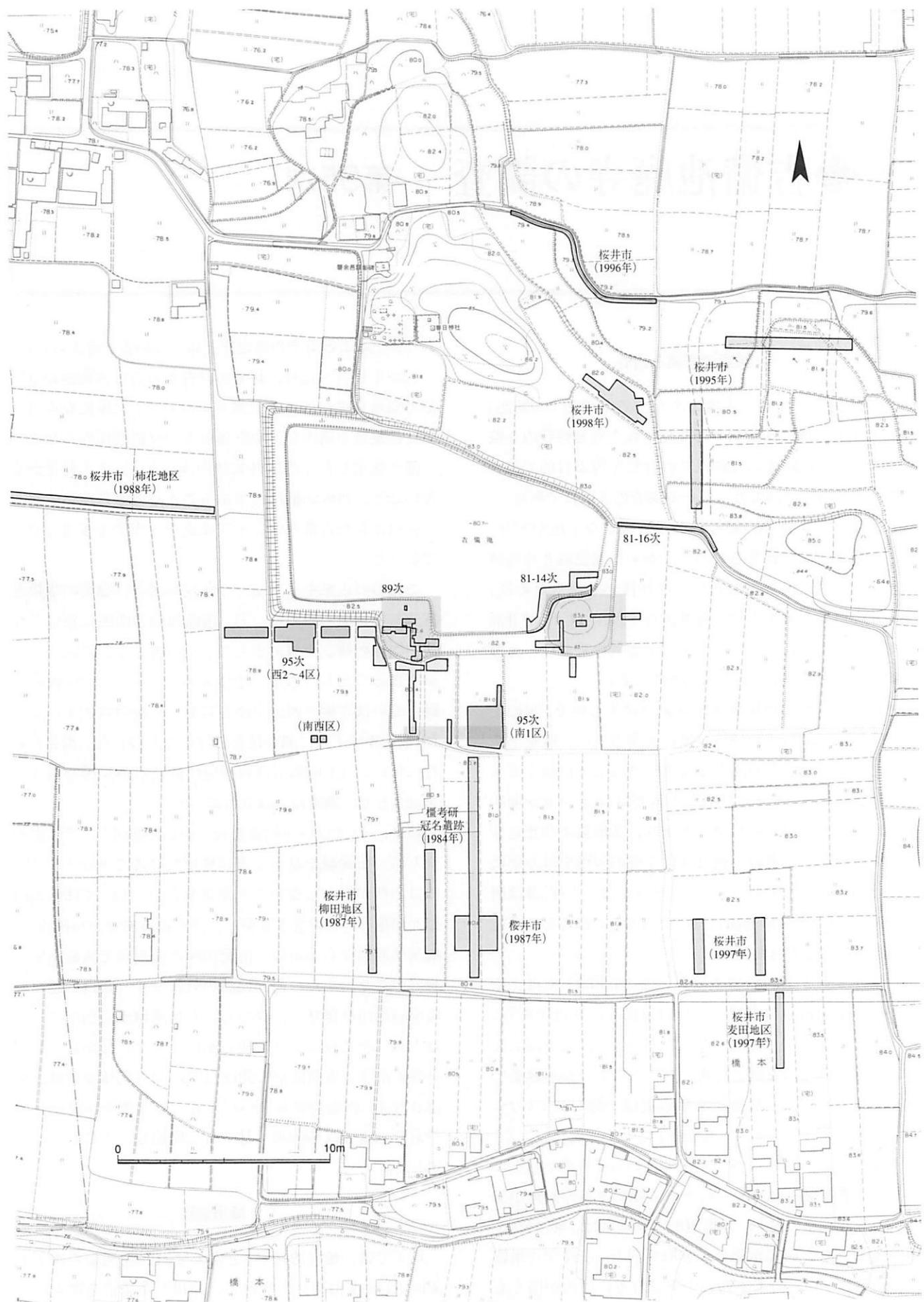


図71 第95次調査位置図 1:2500

南1区

吉備池廃寺に関連する遺構として、南面回廊SC160とその足場穴列SA181・182などがある（図72・73）。

南面回廊SC160 第89次調査の東延長上で、長さ17m分を検出した。南雨落溝にあたる石組溝SD161、北雨落溝の抜取溝SD162、その南岸の黄色粘土の帶SX183、回廊北側柱礎石抜取穴SX185とからなる。

石組溝SD161 幅約1m、深さ0.4mの掘形溝を掘り、その両側に25~50cm大の自然石1石を立て並べている。幅35~45cm、深さ30cm。検出した17m分で西方が約22cm低い。流水による堆積土はなく側石の上まで均一な粘質土で丁寧に埋め立てられている。

抜取溝SD162 幅1.5m、深さ15cmの浅い素掘溝で、底には抜き取られた石の痕跡が点々とみえる。

この溝の南岸にある黄色粘土の帶SX183は、第89次調査区でも確認され、抜取溝よりも古い造作で、基壇縁石の掘形か抜取りの可能性がある。その場合、石組溝SD161の内側は後述するSD180で流されていて確認できないが、基壇の南縁石は石組溝北側石の内側に想定され、回廊基壇幅は約5.6mと推計される。

回廊基壇上は、回廊の南側柱列が東西溝SD180で壊されている上に、基壇土に相当する土はほとんど残されていない。その上面で北側柱列の礎石抜取穴に関わるとみられる土質の違い（SX185）を6箇所確認した。桁行柱間は約3mに復元されるが、SX185は極めて痕跡的であって、その真偽を含めて、なお検証が必要である。

南面回廊のこうした状況は、東西溝SD180の存在を除いて第89次調査での所見と同じで、回廊基壇が大きく削平されていることを伺わせるが、それが塔の真南から塔-金堂の中軸線を越えたところまでの長さ48mについてはほぼ真東西に、一直線に延びていることが判明した。

掘立柱塀SA181・SA182 抜取溝SD162の下で検出した塀SA182は一辺0.3~0.7mの不整形な掘形で、径15cmの柱痕跡が残る。柱間は約2.1m。抜取溝より古く、柱痕跡に基壇土起源の黄色粘土が入る。石組溝SD161の南にあるSA181は石組溝の掘形よりも古い柱穴で、柱間、掘形の規模などもSA182に似ている。

SA181とSA182とは柱位置が微妙にずれており、両者を一体で先行する建物とみると難しく、ともに回廊造営時の足場穴であろう。回廊が未完成であったとする

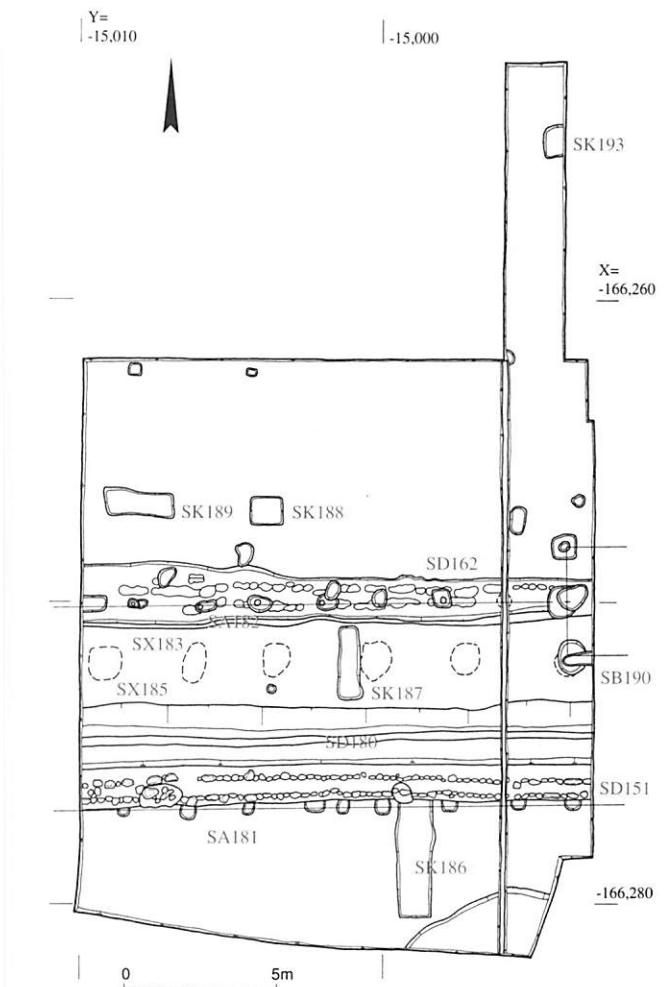


図72 第95次調査南1区遺構図 1:250

議論が成立しないことを示す重要な知見である。

土坑SK193 一辺1.2m、深さ0.1mの浅い土坑で、比較的多くの瓦類が出土した。瓦廃棄に関わるのであろう。

吉備池廃寺廃絶後の遺構には、掘立柱建物SB190、東西溝SD180、土坑SK187~189といくつかの柱穴がある。また、寺造営以前の遺構に南北土坑SK186がある。

掘立柱建物SB190 調査区東端で検出した一辺1.0m、深さ0.5mの柱穴3個で、いずれも柱掘形に回廊基壇土が起源と思われる黄色粘土塊が入り、中央の柱穴は抜取溝よりも新しい。柱間は2.1m等間に復元でき、東西棟建物の西妻柱列と思われる。

東西溝SD180 幅3m、深さ0.8mの素掘溝。底中央部には細い砂溝がある。北壁沿いの堆積土には黄色粘土が混り、上は黄色粘土で埋め立てる（図73）。堆積土からは比較的多くの吉備池廃寺の瓦類と飛鳥IV~Vの土師器甕・杯、馬骨、木製品などが出土した。位置が推定藤原京三条大路に近く、その北側溝の可能性があるが、規模の大きさと西方で検出されていない点に疑問が残る。

土坑SK187~189 大きさと形状と配置に規格性があり、小礫の多い埋土が共通する。SK189には藤原宮期の土師器杯A等が少量含まれ、当該時期の一連の遺構である

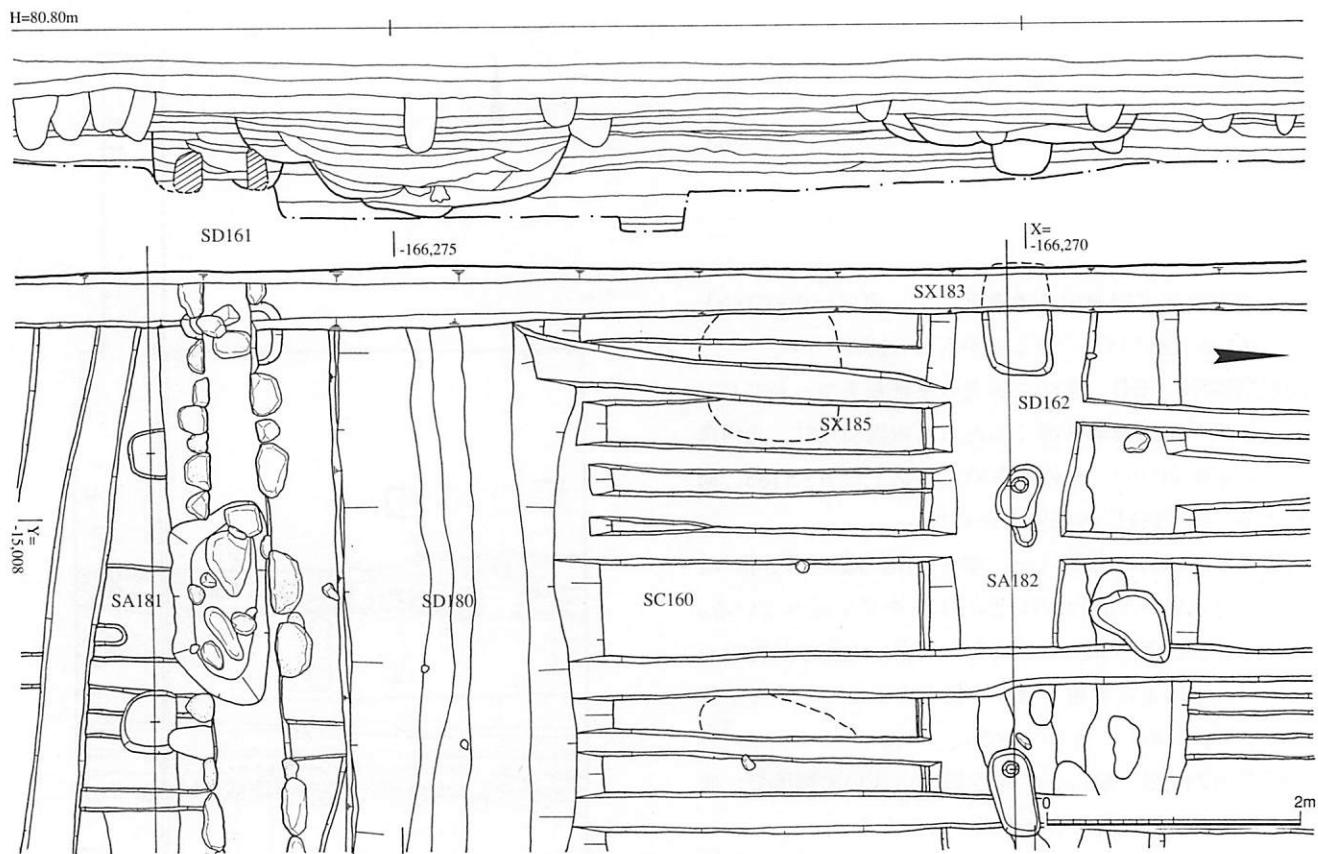


図73 南面回廊SC160土層図・平面図 1:60

らうが、性格は明らかでない。

その他、柱穴には柱掘形あるいは柱痕跡に黄色粘土が入る浅いものと、埋土が灰色粘土で深いものがある。前者は吉備池廃寺廃絶後の柱穴で、後者は寺以前の柱穴の可能性がある。いずれも建物にまとまらない。

土坑SK186 幅1.2mの南北に長い土坑で、石組溝SD162より古く、埋土には古墳時代の土器細片が含まれるもの、時期・性格は決め難い。

西2～4区

塔の南北中軸線上にある第89次調査区の西に設定し、後に西3区について拡張した(図74)。

吉備池廃寺に関わる遺構には西面回廊SC200、その東側の南北堀SA204、回廊の下から西南方へ延びる溝SD210及びその関連遺構と、土坑SK216～218がある。

西面回廊SC200 西2区の西半部にある溝SD201、礎石抜取痕跡SX203、西2区と西3区との間の水田畦畔下で確認した石抜穴SX202が、回廊に関連する遺構と思われるが、いずれも極めて痕跡的であって別の地点での検証が必要である。

溝SD201 塔基壇の西約23mにあり、北端を柱穴SX205で、中央部を中世の南北小溝で壊されるが、両側底に灰色粘土が点々と続く。この所見は南面回廊の抜取溝SD162と類似しており、西面回廊東雨落溝の石組の抜取溝と考えた。

石抜穴SX202 SD201の西約6mにある水田畦畔下で検出した直径20～30cmの石抜穴4個で、後述する暗渠SD210の埋土である黄色粘土の上面に掘り込まれている。周辺には中世の小溝を除けば、他に遺構はなく、SD201との位置関係から西雨落溝に関わる遺構と考えた。

礎石抜取痕跡SX203 南面回廊のSX185と同様わずかな土質の違いとして認識できる程度で、ここでも回廊基壇は大きく削平を受けていると判断される。

堀SA204 回廊東雨落溝SD201の東2mにある2個の柱穴で柱間1.6m。北の穴が小さな長方形で浅く、南が方形でより深い違いはあるが、ともに掘形埋土に多量の黄色粘土を含む。中軸線をまたぐ位置にあるが性格不詳。

溝SD210 西面回廊下から西南西へ延びる黄色粘土の帶SX215を掘形とし、その底に造られた幅0.9m、深さ0.15mの素掘溝で断面が浅い箱形をなす。掘形は断面V字形で幅2m、深さ0.6m。中央に人頭大の河原石を積み上げ、それを黄色粘土や灰色粘土で厚く覆う。この構造は金堂の掘込地業の底の様子と類似しており、暗渠であった可能性が高い。SD210は西3区西端まで約22m分を検出し、その間で約35cm西方が低い。中枢伽藍内部の水を西面回廊の下をくぐり排水する目的であろう。

溝は近世井戸SE220以西では、上半部を素掘溝SD225に壊される。SD225は幅1.8m、深さ0.5mの断面箱形で砂質土が水平堆積し、SX215埋土のような河原石はない。

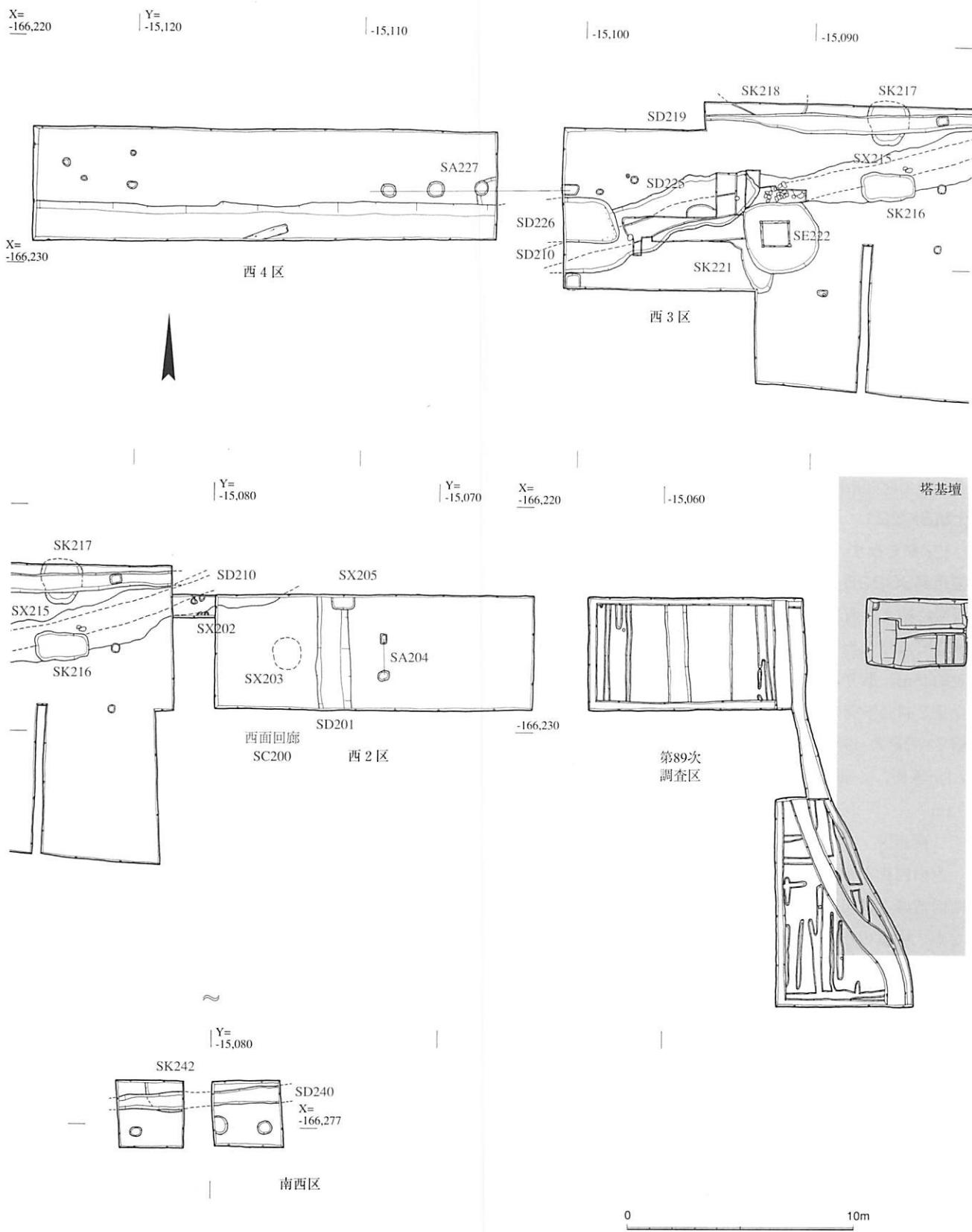


図74 第95次調査西2~4区・南西区遺構図 1:250

土坑SK216～218 SK216は溝SD210を埋立てた黄色粘土上に掘られた東西に長い長方形の土坑で東西両辺側が浅く中央部が深い。東西2.3m、南北1.2m、深さ1.0m。その北3mにあるSK217は径約2mの円形土坑で、西辺には幅5cm、長さ30cmの板2枚が打ち込まれている。両者は埋土が類似する上に、南北に並んでおり、礎石抜穴等の可能性を考慮して、調査区を拡張したが南には続かない。西方のSK218も埋土が共通した土坑で、これら3つの土坑は、溝SD210より新しく、後述する藤原宮期の東西溝SD219より古い。寺廃絶に関わる土坑であろう。

吉備池廃寺以後の遺構には、西3区に東西溝SD219、土坑SK221、西4区に東西溝SD226、塙SA227などがあるほか、いくつかの柱穴および近世井戸SE220がある。

東西溝SD219 溝SD210の北にある幅0.6～0.9m、深さ0.1mの素掘溝で、藤原宮期の土器が出土。推定藤原京三条大路の北60mに位置し、坪内区画溝の一つであろう。

土坑SK221 近世井戸の西にある逆L字形の土坑。底はV字形をなす。上層から比較的多くの瓦が出土した。

東西溝SD226 幅2.1m、深さ0.3mの素掘溝で、西3区西端に始まり西4区以西に延びる。長さ26mを検出した。杭等で護岸した東端は九条大路の西約48m、三条大路の北約48mにあり、坪内の堀割であろう。藤原宮期の土器少量と判読不能の木簡、板材、獸骨などが出土した。

塙SA227 溝SD226の北1.5mを併走する塙で、柱間2.1m等間、4間分検出した。柱穴は辺0.6m、深さ0.2～0.4m。

南西区

西面回廊が痕跡的であったため、より明確な南面回廊南雨落溝を検出して回廊南西隅部を確定するために設けたが、中世の小溝の他は東西溝SD240と土坑SK242、柱穴数基を痕跡的に確認したにとどまる（図74）。

東西溝SD240 幅0.8m、深さ0.1mの素掘溝で、埋土には砂礫が多く含まれ、藤原宮期の土器が少量出土した。溝の位置は南面回廊南雨落溝の西延長線のやや北にあり、その抜取痕跡である可能性があるが、西面回廊西雨落溝想定線以西に延びる点で疑問がある。また、出土土器からは三条大路北側溝の可能性もあって、決めがたい。

土坑SK242 東西溝SD240の下で検出した土坑で、回廊外雨落溝の南西隅想定位置に近いものの、東の調査区で検出されない疑問点がある。

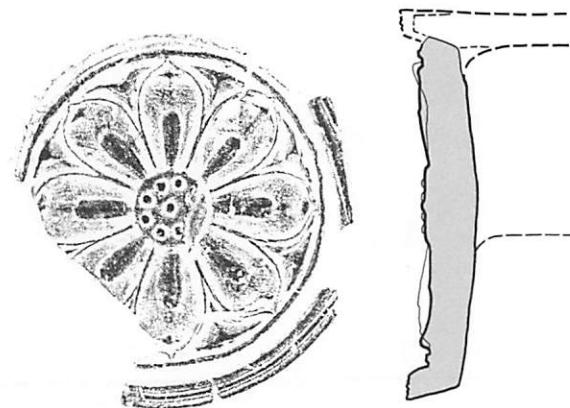


図75 第95次調査出土軒丸瓦 IA 1:4

いずれにせよ、南西区の遺構検出面は、約84m離れた南1区よりも1m余り低く、南1区の石組溝がその傾斜のまま延びているとした場合、石組の下面がSD240の底に相当する。この地区では回廊関連遺構は完全に流失していることも考えられ、西面回廊についてはより良好な状況での調査結果を待ちたい。

3 出土遺物

土器・瓦類のほか木簡、板材、鉄釘、獸骨などがある。

土器・土製品 土師器、須恵器、瓦器、白磁・青磁、施釉陶器、円筒埴輪などがある。東西溝SD180、土坑SK189、東西溝SD226に飛鳥IV～Vに属するものがやや目立つ程度で、寺跡に直接関わる土器はほとんどない。

瓦類 軒瓦、丸・平瓦がある。主に東西溝SD180、土坑SK193と西3区の土坑SK221周辺から出土し、SD180からは全体の半量を得た。軒瓦は吉備池廃寺創建軒丸瓦IでIA、IBの2種がある。総数10点。内訳はIA6点、IB2点、種別不明2点。軒丸瓦Iは山田寺式軒丸瓦の祖型となる単弁八弁蓮華紋で、半球形の中房に1+8の蓮子をもつ。『年報1997-II』では外縁を五重圈紋と報告したが、実際は三重圈紋でその外側は緩い斜縁である。三重圈紋の二重目が幅広い特徴は、後の山田寺式軒丸瓦に受け継がれる。IAとIBの紋様はきわめてよく似ているが、IBの方が子葉や蓮子の配置が整然とし、IAより若干大きな中房に同心円状にめぐる微妙な凹凸があること、外縁の三重圈紋の外から一、三重目がIAより太いことなどで判別できる。丸瓦の取り付け手法は丸瓦の広端凹面側を斜めに削るだけのものと、そこに縦方向の刻み目を加えたもの（図75）がある。

丸・平瓦の内訳は丸瓦130点(29kg)、平瓦596点(80kg)で、ともに厚手品(厚さ1.8～2.6cm)と薄手品(1.1～1.6cm)とがある。凸面をナデ消すものが多く、わずかに平行・正格子・斜格子叩きを残すものがある。

4 成果と課題

今回の調査は前回までと異なり、検出した遺構は痕跡的で、当初に掲げた課題が十分解明されたわけではない。以下、成果と課題を列記してまとめたい。

＜塔・金堂中軸線上に中門はない＞

前回までの調査成果からかなりの蓋然性があると思われた塔と金堂の中央南面に中門が開くとの推定は、その中軸線を横切って、塔跡の真南で検出されたのと同じ規模の回廊を検出したことで否定された。

中門推定の根拠の一つであった塔・金堂中軸線付近で南に張り出すと見えた水田畦畔は、条里復元図を巨視的にみれば、むしろ塔前付近が北へ寄っているのである。また、遺構図に図示しなかったが、調査区全域で検出された水田耕作に関わる小溝は、南1区南端、石組溝の南2m付近以北では南北方向に著しいのに対して、以南は1984年調査の冠名遺跡を含めて東西方向に著しい。この所見はこの位置が中世段階の水田畦畔・里境の位置であって、より南にある現在の畦畔と小さな水路が形成されたのがそれ以後であることを明確に示している。「遺存条里」による古代遺跡の推定復元の落とし穴であろう。

なお、冠名遺跡の北半が河川状を呈しているとの所見を以て、そこに幅50m以上の河川の存在を想定し、それを「百済川」とみる説もまた、根拠に欠ける。昨年の回廊検出地点や今回の西3区周辺の遺構検出面下には精良な砂層があり、そこには北東部の丘陵に平行した南東～北西への古い流路が確認できる。近世井戸はその水脈に掘られたものである。また、南1区南端には東西方向に砂礫層がみられるが、磨滅した吉備池廃寺の瓦が中世近世の土器とともに含まれている。冠名遺跡北半に広がる幅50m以上の河川とはこの中世の砂礫層をさす可能性もある。いずれにしても、吉備池廃寺段階の河川ではない。そもそも百済大宮と百済大寺が建てられた場所を示す「百済川辺」の語がもつ距離観は主観的であって、百済川が約200m離れた現在の「米川」である可能性もあり、川の存否は寺名比定の是非を問う根拠にはなるまい。

＜回廊は完成していた＞

建物造営の手順では基壇外装や雨落溝の施工は、建物の造作でそれらを傷つける恐れのなくなった段階で行われるものである。今回、南面回廊南雨落溝を広範囲に検

出し、加えて、雨落溝施工以前の足場穴列が検出された。回廊未完成説は成立しえないのである。僧房とも推定される吉備池北東部の掘立柱建物の存在からも、伽藍の完成度はかなり高かったものと考えるべきである。

しかし、検出した西面回廊は極めて痕跡的な状況であり、西南隅についてはさらに明確でない。今後、より良好な地点での検証を必要としている。

＜中門の位置と伽藍配置は？＞

回廊は完成していたのに、塔・金堂の中軸線上に中門はない。ではどこにあるのか。回廊は塔の真南でも確認されているから、西面と塔・金堂中軸線までの南面は回廊で閉じられており、東西に長い掘込地業をもつ金堂が南面するのはほぼ確かであるから、中門は南面回廊上の塔・金堂中軸線以東に想定しなければならない。残された候補地の第一は金堂正面であろう。

しかし、その場合は中門が伽藍の東に偏することとなり、中門の位置まで含めた場合の典型的な「法隆寺式伽藍配置」のモデルとはなりえない。いずれにせよ、これまで知られていない配置である。

また、伽藍の左右対称性を念頭に置いて、金堂の東や北に他の堂塔を配置する伽藍とみることも、金堂の東の地形からは困難な想定である。すなわち、昭和30年代作成の地形図（図71）では、金堂の東に低い残丘（小字カウベ）があり、西北方の春日神社裏山まで微高地が連なっている。吉備池の北辺の堤はその南北裾を結ぶ位置と方向にある。池北東部での桜井市の1998年調査では、僧房と推定する掘立柱建物は赤黄色の山土上で検出されていて、そこが丘陵の一部であったことがわかる。吉備池廃寺あるいは藤原京の造営に際して削平整地したと考えられる。近年まで丘陵が残る所に、堂塔および東面回廊が作られていたとは考えられない。

現段階で伽藍規模を概算すると、回廊の東西幅は、塔・金堂基壇間の中点から西面回廊西雨落溝推定線までの距離約84mを折り返した約168mの数値が得られ、小字カウベの丘陵西裾におさまる。同様に南北幅は、検出した南面回廊南雨落溝が塔の南端から36.8mにあり、塔の辺長を30mとし回廊が南北対称にめぐると仮定した場合、その数値は約104mとなる。しかし、東西幅については、塔・金堂基壇間の中点が伽藍の東西の中軸であることを示す施設などは確認されなかつたし、南北幅についても、

塔の一辺長30mは未確定で、巨大な抜取穴の中での心礎の位置も決めがたい。さらに、塔の中心と金堂の中心とは2~4m程ずれていて、そのいずれが伽藍の南北中軸線であるかは、なお検討が必要である。伽藍・回廊規模の確定は中門、東面回廊などの検出を待たねばならない。

＜寺地の範囲は？＞

西3区の溝SD210は、その構造と傾斜から伽藍内部の排水を意図した暗渠である可能性が高く、少なくとも確認した西端（西面回廊の西約22m）までは寺地に含まれる。また、その西24mまで及ぼした西4区内でも西限を示す遺構は検出されていないから、西限は南北里道かその外側と考えられる。他の辺についてはさらに確認がないが、東については比較的多量の吉備池廃寺の瓦が発見された桜井市1995年調査地が含まれるであろうし、北は春日神社裏山を含めた地域までは及ぶであろう。南限は樅原考古学研究所の1984年調査地に及ぶのは確実で、河川状地形の再確認を含めて今後検証が必要であろう。

＜その後の吉備池廃寺＞

今回の調査では東西溝SD180、土坑SK187~189、掘立

柱建物SB190、東西溝SD219・226、東西溝SA227など、藤原宮期の遺構を多く発見した。

吉備池廃寺周辺は藤原京域に含まれ、塔跡西端付近に東九坊大路が、南1区南端付近に三条大路がそれぞれ推定される。周辺の調査でも、冠名遺跡、その西の柳田地区、池東北部の1995・1998年調査などで、藤原京の坪内区画溝、掘立柱建物、藤原宮式軒瓦などが検出されており、藤原京の遺構・遺物は案外濃密である。金堂南西部の掘立柱建物も、藤原京の街区に営まれたものと理解される。

藤原京の造営は百済大寺が天武2(673)年に高市の地に移されてから10年未満、天武朝には始まったとされる。残された土壇の上に建っていた百済大寺の堂塔の威容が記憶にお鮮明な頃、その近辺にまでも建物が営まれているのである。跡地がいかに取り扱われたのか。元慶4(880)年、大安寺に返還された百済大寺の旧寺地である十市郡百済川辺の田一町七段百六十歩（『日本三代実録』）がいつ取公されたのか。吉備池廃寺は藤原京の条坊施工や街区利用の実態をさぐる上でも重要な遺跡といえよう。

（西口壽生・瓦：伊藤敬太郎）

表6 その他の発掘調査・立会調査概要

調査次数	遺 跡	概 要
飛鳥藤原 第91-2次	山田寺	史跡整備に伴う立会。里道の盛土を除去したが、遺構面に達しなかった。また西面大垣推定地で排水溝を設置したが、大垣は検出されなかった。
第91-3次	左京五条三坊	住宅建設に伴う調査。中世の南北溝を検出した。
第91-4次	山田寺	住宅建設に伴う調査。弥生時代～藤原宮期の遺物包含層を確認。顕著な遺構は検出されなかった。
第91-5次	奥山久米寺	史跡整備に伴う立会。遺構面に達しなかった。盛土中から瓦類を採集。
第91-9次	左京一条一坊	国道165号線の拡幅に伴う調査。水路工事・水道管理設工事の掘形にあたり、調査区壁面が軟弱で、土層観察のみを行い、詳細調査を断念。
第91-10次	左京一条一坊	国道165号線の側溝付替工事に伴う立会。盛土内での掘削で、遺構面に達しなかった。
第91-11次	宮西面内濠	縄手池南東の史跡環境整備工事に伴う立会。遺構面に達しなかった。
第91-12次	山田寺	史跡整備に伴う排水溝設置工事の立会。遺構面に達しなかった。
第91-13次	飛鳥池遺跡	吉野川分水改修工事に伴う立会。立木の移植のため幅約90cm、深さ1.5mを掘削したが、表土直下が地山岩盤となり、遺構・遺物ともになし。
第91-14次	飛鳥池遺跡	万葉ミュージアム建設に伴う立会。外周水路工事末端部で平安時代以降の流路堆積を、構内配水管設置位置で藤原宮期以降の遺構面を確認。顕著な遺構は見られない。
第91-15次	内裏西官衙地区	農小屋の建て替えに伴う調査。藤原宮期の遺構面と宮廐絶後の斜行溝または土坑の一部を確認。藤原宮期の遺構はなし。
第91-16次	宮西面内濠	縄手池南東の史跡環境整備工事に伴う立会。遺構面に達しなかった。
第91-17次	飛鳥寺南面大垣	万葉ミュージアム建設に伴う緊急立会。擁壁工事に際し、飛鳥寺関連遺構を検出、土層を確認。のちに第97次調査を行った。